みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：トランスナショナル・フローとローカリティの組み換え的創造：構築される移民空間のローカリティとストリート性：『エスニック・タウン』の誕生とストリート：ロサンゼルスのカンボジア・タウンの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝日, 由実子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001214

関根康正編『ストリートの人類学』下巻
国立民族学博物館調査報告　81 : 327−365 (2009)

『エスニック・タウン』の誕生とストリート
ロサンゼルスのカンボジア・タウンの事例から

朝日由実子
上智大学大学院

近代化やグローバル化の中での流動化現象により，特に都市社会において，人間と場とのつながりの希薄化が指摘されてきた。自分の足場の危うさに悩み苦しむ者は，日本でも増加の一途である。一方で，改めてそのつながりを意識的に再生，あるいは新しい形で築こうとする試みが世界各地で見られている。本稿で取り上げる，2007 年 7 月 3 日にアメリカ合衆国ロサンゼルス郡ロングビーチ市において誕生した「カンボジア・タウン」の形成過程に関する事例は，エスニシティを軸としたその試みの 1 つと言えるであろう。アメリカにおけるカンボジア系住民の歴史は新しく，多くは 1970 年代以降，難民として渡った人々あるいはその 2 世，3 世の人々であり，現在全米で約 21 万人を数える。アメリカ政府の分散居住政策により，当初は全米各地に分散したが，その後，再移住をし，アナハイム・ストリート（Anaheim Street）を中心としたロングビーチ市に集住化が始まる。アナハイム・ストリートには，すでにメキシコ系住民を中心とする多くの他者が居住していたが，カンボジア系コミュニティのリーダー達を中心とした「ホーム」を希求する声は抑えがたく，軋轢を生みつつも，商業的な効果を前提としてカンボジア・タウンという「名づけ」への承認を公式に取り付けるに至った。

1　はじめに
2　多民族都市ロサンゼルス
　——世界における移民の中心地
　2.1.　アメリカ合衆国への移民の流入と国民統合
　2.2.　多民族都市ロサンゼルス
3　1970 年代におけるカンボジア社会の混乱とアメリカ合衆国への移住
　3.1.　カンボジアにおけるエスニシティと居住地域
　3.2.　カンボジア社会の混乱と難民の国外流出——「東洋のパリ」の瓦解
4　アメリカ合衆国へ，そしてロングビーチ市へ
　4.1.　“the 75 people”, “after 80 people”
　　——カンボジア難民の 2 つの波
　4.2.　アメリカ政府の分散居住政策と相互扶助組織の設立
　4.3.　ロングビーチ市への集住化
　4.4.　ロングビーチ市における民族的多様性とその対立
　4.5.　今日のカンボジア系住民の全体的社会経済状況
5　ロングビーチ市における「カンボジア・タウン」の誕生
　5.1.　2007 年 7 月 3 日
　　——「カンボジア・タウン」の誕生
　5.2.　カンボジア・タウン副会長の見るカンボジア・タウンとカンボジア系住民
　5.3.　純粋性の志向と現実
　5.4.　ストリートでのパレード
　　——誇りと自信から来る場所の内在化
　5.5.　ホームとしてのカンボジア・タウン
6　消費資本主義とエスニック・タウンのテーマパーク化
7　終わりに

キーワード：エスニック・コミュニティ，ロサンゼルス，カンボジア難民，集住，名づけ

1 はじめに

「ロングビーチは，カンボジア系人口にとってカンボジア国外で最大のホームである。アナハイム・ストリートのある区画は，カンボジア・タウンと名づけられ，カンボジア系のビジネスが最も集中し，長い間カンボジア系コミュニティの中心（heart）と捉えられてきたホームである。」（カンボジア・タウン社公式ホームページ）

今日グローバリゼーションの中で，トランスナショナルな人の移動は増々加速化し，特に移民受け入れ社会において，地域社会を構成する人種・民族構成は複雑化している。ホスト社会において少数派である移民は，かつては偏見や差別などの外的圧力によってゲットーなどに集住せざるを得ない場合も少なくなかったが，現在では1960年代に始まるエスニック・リバイバル運動[1]の影響もあってか，積極的に自らのエスニック・グループ名を冠した「○○タウン」を構築しようという動きも顕著である。

本稿では，2007年7月3日にアメリカ合衆国ロサンゼルス郡ロングビーチ市に誕生した「カンボジア・タウン」の事例を中心に，母国や民族への原初的な愛着とはまた違う形で，むしろ移民社会に根付き生きていくために，今ここに自分が存在するという確かな帰属意識を持てる起点――「ホーム」としての新たな場所づくりの在り方を検討したい。すなわち，没場所性が叫ばれる現代にあって，在米カンボジア系住民自らが，政治的経済的思惑も抱えつつ，集団として，また個人として帰属意識の持てる特定の場所，イメージを「ホーム」として獲得していく過程および現在について，未だ限られた資料ではあるが，先行研究および2007年10月に実施した筆者の短期臨地調査の結果より概観する。

またその際に，何故ひとつの建物だけではなく，匿名の人々が実際に行き交うストリートを含めた場所を，「ホーム」とするのかの意味についても検討する。誰もが，自由に往来できる公共空間であるストリート自体を，「ホーム」とするには，そこを共有する誰かとの共通のコード，関係をむしろ構築せねばならない。たとえば閉じられた建物の存在だけでは，自己完結も可能である。しかし，ストリートにおける共通のコード作りを通して，初めて他者をも巻き込んだ，さらには他者にも承認されうる自己の存在として，生きている確からしさを手に入れることができるのではないか。故に，決して閉じていないストリートにこだわる意義がある。しかしそれは同時に，生きているが故に安定せず，常に他者との緊張を孕んだものにもなりうる。最後に，こうした動きの一方で，「帰属意識を形成する場所」としての特殊性が，都市の風景が画一化する中で，文化的な資源としての「差異」として，肯定的な意味において再びリバイバルしつつある。そうして移民の集住地が，消費資本主義的に活用されて表象され，特色付けられた商業的区域としてパッケージ化，脱意味化に至る可能性もあることを指摘する。

尚，今後検討すべき用語であるが，本稿では便宜的に，あるエスニック・グループが

集住したり，ネットワークを形成していること，場を「エスニック・コミュニティ」と呼び，より商業的に表象されたり，公的な地区として登録された場を「エスニック・タウン」と呼ぶことにする。

2 多民族都市ロサンゼルス——世界における移民の中心地

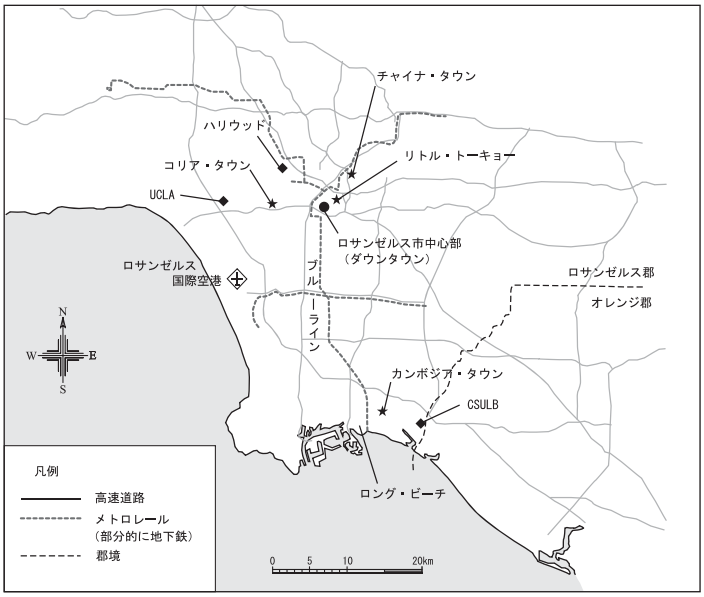
2.1. アメリカ合衆国への移民の流入と国民統合

第二次世界大戦以前から，日本や中国を始め，労働力として政策的に国民をより労働力の必要とする場へと国際労働移動をさせていた例は存在する。しかし，近年の国境を越えたトランスナショナルな人の移動は，往時のような集団的な移民政策のみならず，内戦のため祖国を脱出した難民，非合法経済移民などあらゆる目的，階層の人々による移動が増々加速している。世界的に流動性が高まる時代の中でも，アメリカ合衆国は18世紀後半の建国以来，移民が流入し続ける国として，世界に先行する異なる者たちによる「共同体」づくりの実験場と言われてきた。そこでは，多様な人種・民族から構成される人々を，いかに国家としてひとつのまとまった社会へと統合するかの，様々な同化理論が生み出されてきた。当初は，アメリカ合衆国建国の中心を担ったアングロサクソン系住民の文化への同化理論が主流であったが，やがて新たなアメリカ・アイデンティティの元に融合すべきという「るつぼ理論」(melting pot theory) が出てきた。そして，現在統合の対象となるのは，人種・民族のみならず，ジェンダーなどあらゆる分野にわたるが，一方でそれらのグループの多様性を保持したままの共存の方向性を探る文化的多元主義（cultural pluralism）の時代へと突入している（明石・飯野 2004)。

こうしたアメリカへの移民は，1965年の移民法改正により，第3世界からの移住の障害となってきた条件が取り除かれ，それまで約6割を占めていたヨーロッパ諸国からの移住から，アジアやラテン・アメリカからの移住が約8割を占めるようになった（藤田 1998: 83)。それに伴い，アメリカ社会のエスニシティの多様化は一気に進み，かつての〈白人対黒人〉,〈先住民対征服者〉といった二項対立軸だけではなく，エスニック・マイノリティ間の軋轢も問題になりつつある。

2.2. 多民族都市ロサンゼルス

前項で述べたアジアやラテン・アメリカからの新参移民の多くは，言語能力を比較的問われない農園労働者や工場労働者などとして，カリフォルニア州を中心とする西海岸に集中してきた。商務省国勢調査局のレポート（United States Bureau of the Census 1993）によれば，アジア系人口の54%が西海岸に集中（アメリカ総人口では，21%が西海岸居住）し，全米50州の中でも，カリフォルニア州，ニューヨーク州，ハワイ州への集中の度合いが高い。



地図１　ロサンゼルス郡周辺図（筆者作成）

特にカリフォルニア州南部に位置するロサンゼルス郡は，アメリカ合衆国の中でもエスニシティの多様性が最も高い地域であると言われており，世界でも有数の「移民の中心地」となっている。また同郡と合わせて南カリフォルニア経済圏を構成する隣接のオレンジ郡もアジア系移民の多い地域である。（藤田 1998: 83）。ロサンゼルス郡内には，中核都市であるロサンゼルス市をはじめとする 88 の市がある。中でもロサンゼルス市と南部にあるロングビーチ市内には，アジア系住民によるエスニック・コミュニティが多数存在する（地図１参照）。ロサンゼルス市のダウンタウン近郊には，今日まで続くロサンゼルスの市街地発祥の地であるスペイン人によって創られたたオルベラ街をはじめとし，チャイナ・タウン，リトル・トーキョー，コリア・タウンが，またその他郊外にもリトル・インディア，タイ・タウンなどが存在する。さらに南にあるロングビーチ市には，カンボジア・タウンが，ロングビーチ市に隣接するオレンジ郡にはリトル・サイゴンなどがある。これらのエスニック・コミュニティは，新参移民が，アメリカ社会に定着するために必要な相互扶助や，エスニック・メディアなど生活に必要な機能が集積する場であった。チャイナ・タウン，リトル・トーキョーの歴史は第二次世界大戦以前からと古く，実際には中国系アメリカ人，日系アメリカ人の多くは，すでに他所に居住している。しかし，「歴史的場所」として人々の記憶を留めておくため，移住初期の集住地に移民の定住化の歴史を主な展示内容とする博物館（中国系アメリカ人博物館[2]，全米日系人博物館[3]）などを建設し，2 世，3 世への文化継承の中心地となる他，開かれた観光地となっている。特にチャイナ・タウンは，メトロ・ゴールドラインの駅名のひ

とつにもなり幅広く認識されている。チャイナ・タウンや，リトル・トーキョーには，金属のプレートに場所の謂れや，各ストリートの歴史的役割などの説明が書かれた標識が要所要所の街灯に取り付けられている。リトル・トーキョーの中心部には，宇宙飛行士となった日系人 Ellison S. Onizuka 氏の功績を称え，その名を冠したオニヅカ・ストリートも存在する。一方で，コリア・タウン，カンボジア・タウンなどは，移民がアメリカに定着するようになってから比較的まだ新しく，実際の居住地であったり，生活のための食料品や雑貨の売り買いの場としての機能が中心となっており，観光地としての整備は進んでいない傾向がある。

3 1970 年代におけるカンボジア社会の混乱とアメリカ合衆国への移住

3.1. カンボジアにおけるエスニシティと居住地域

さて，本稿で触れるカンボジア系アメリカ人の出自国である――カンボジア本国における民族構成とその居住地域の状況について簡単に整理しておきたい。今日，カンボジアの総人口は，約 1,400 万人といわれ，その約 8 割が農村に居住し，農業等に従事する農業国である。直近の国勢調査（1998 年）の結果（NIS, Ministry of Planning 2006）によれば，国内の民族構成は，モン・クメール語族系のクメール人が約 90％を占め，東南アジア諸国の中でも比較的均質な社会である。その他にそれぞれ 5％の中国人とヴェトナム人それに少数のチャーム人，ビルマ人が，そして「インドシナ原住民」とされるプーノン族やクォイ族などの山岳少数民族がいるとされており，アメリカの統計において「カンボジア人」と括られる人々の中でも民族的背景の差異はあると考えられる。

カンボジアにおけるエスニック・マイノリティの置かれている地位を一枚岩に語ることは出来ないものの，近代化による流動化が進む以前には，一般的にマジョリティであるクメール人が一部の都市に住む王族や官吏となっている者を除き，農村に居住して農業を営むのに対し，中国系は都市部や河川沿いでの商工業に従事し，ヴェトナム系が漁業などに従事するなど，比較的ゆるやかな分業形態にあったことが指摘されている（デルヴェール 2002: 44）。しかし一方で，15 世紀半ばのアンコール王朝崩壊以降，王家の内紛に隣国のタイ，ヴェトナムの勢力が絡み，東西両端の領土が蚕食された他，近現代においても，フランス保護領時代（1863 年～1953 年）の官吏などとして徴用された特にヴェトナム人に対する敵対的感情が残されている[4]。1953 年の対仏独立以降には，近代化政策に基づく「カンボジア国民」としての同化政策が進み，現在のカンボジアでは，マジョリティであるクメール人を中心に国民の大半が公式言語であるカンボジア語を話し，上座部仏教を信仰している。その他に，ヴェトナム人を中心としたキリスト教徒，イスラーム教を信仰するチャーム人などがいる（NIS, Ministry of Planning 2006: xxii）。

今日の首都プノンペンへの遷都は，19 世紀半ばのフランス保護領時代に始まった。プノンペンはそれまで，中国系住民を中心とする多民族で構成されていた河川港沿いの商都であった。沼地であったが，フランス人技術者らの都市計画に則って，湖沼を埋め立て，ガーデン・シティとして計画的に開発された。1920 年代には，首都中心部に，北部はヨーロッパ人（*Europeen*）街，市場周辺に中国人（*Chinois*）街，王宮周辺にカンボジア人（*Cambodgien*）街，それに南部にヴェトナム人（*Annamite*）街など各エスニシティごとの居住区画がつくられた（Vann 2003: 154–156）。現在のプノンペンには，こうした上からの区画は無いものの，同郷会館や宗教施設などを中心として中国系，ヴェトナム系住民の集住地域がそれぞれ存在する[5]。

3.2. カンボジア社会の混乱と難民の国外流出——「東洋のパリ」の瓦解

1953 年 11 月 9 日，カンボジアは，約 90 年に及ぶフランス保護領支配からからの独立を達成した。独立の立役者である若き国王ノロドム・シハヌークは，1955 年自らが理想とする王制社会主義体制に基づく体制翼賛的組織「人民社会主義共同体」を結成し，王位を父に譲り，元首となって近代化を目指した。1960 年代初頭には，インドシナ戦争下で政情不安な近隣諸国の中で，カンボジアは「平和な島」であると言われた。当時，独立以降も都市整備が重点的に進められていたプノンペンは，「東洋のパリ」とも称される，東南アジアでも最も魅力ある美しい都市となっていた（岡田 2006: 180–181）。また限定的なものではあったが，近代化，都市化が推し進められる中で，首都において都市的な生活様式を謳歌する人々が増え，中産階級が急成長した。その大半は中国系であった。国内の経済格差も拡大し，たとえば薬剤師を妻に持つ医者と，同年齢の農民の収入は，「天と地ほどちがった」（デルヴェール 1996: 116）。

しかし，世界が東西冷戦時代に突入する中で，カンボジアは政治的中立路線を宣言する一方，経済的には中国の自力更生路線に倣い中国に接近し，次第に対米援助を拒絶するなど不安定な政策を採っていた。さらに，財政危機を招いたシハヌーク体制への不満は政権内部からも噴出していた。1970 年 3 月，シハヌーク外遊中にクーデタによって誕生した右派のロン・ノル将軍による親米政権は，アメリカからの援助に依存し，それと引き換えにヴェトナム戦争の影響——カンボジア領内の反政府・共産主義勢力への空爆の黙認など——がカンボジアにも波及していった。空爆に苦しむ地方の怒りを追い風として，元首の座を解任されたシハヌークは，フランス留学帰りの左派知識人を中心とするクメール・ルージュ（通称ポル・ポト派）と手を結び，カンプチア民族統一戦線を結成し，地方から徐々に都市部へと反政府支配地域を拡大していった。

1975 年 4 月 17 日には，ついに首都プノンペンが反政府軍により制圧され，その後 1979 年 1 月までの 3 年 8 ヶ月に渡る民主カンプチア政権（通称ポル・ポト政権）時代に入ることになる。ポル・ポト政権は，若き日にフランスに留学したサロト・サル（後

のポル・ポト），キュウ・サムポーンなどを中枢とし，中国の毛沢東主義に倣った世界で最高の共産主義社会の建設を目指して，新国家建設の足枷と目された前政権関係者をはじめとする多くの知識人，技術者を殺害した。また早くから早くから解放戦線側にあった農民を，「旧人民」あるいは「基礎人民」と呼んで理想化した一方，都市住民を「新人民」と呼んで差別化し，農村へと下方し，冷遇した。そして，農業の集団化（労働キャンプ），ダム建設事業などの長時間労働への従事，飢えなどによって，多くの人びとが病死あるいは餓死した。ポル・ポト政権時代の正確な犠牲者数については議論があるが，約 700 万人の国民のうち，100～200 万人近くが亡くなったと言われる（デルヴェール 1996: 131）。クメール民族主義者でもあった指導部は，国内に居住していた多くのチャーム人や，ヴェトナム人を殺害した。政権によって住民の移動が厳しく管理されていたため，この間に難民として国外に避難することはほとんど不可能であった。ポル・ポト政権が，カンボジア社会に残した傷跡は大きく，今日に至るまで人びとに物的，精神的双方に深い影響を及ぼしている。

1978 年 12 月，ヴェトナム軍がカンボジア領内に侵攻し，翌年 1 月，ポル・ポト政権は首都プノンペンを放棄し，タイ国境の山岳地域へと逃走した。政権の崩壊と同時に大量の難民がタイ国境に押し寄せ，カンボジア＝タイ国境付近に 30 万人を越すと言われる難民キャンプが次々にできた。難民キャンプから海外への移住の経緯については，在米カンボジア人の伝記（ルオン 2000; Phim 2007: 23–25 etc ...）に具体的な動きを見ることが出来る。難民キャンプで受け入れ先国の決定を受けた人は，タイからフィリピンなどを経由して，フランス，アメリカ，オーストラリア，カナダ，日本をはじめとする第 3 国に安住の地を求め，難民として移住した。また，ポル・ポト政権崩壊以後も，1980 年代のヴェトナム寄りの社会主義政権に対する忌避（中越対立に伴う中国系への冷遇政策）や，1980 年代，1990 年代前半を通じても国内地方各地で反政府軍と政府軍との内戦状態が続いていたことなどから国外への脱出を希望する人は続いていた。

4 アメリカ合衆国へ，そしてロングビーチ市へ

4.1. “the 75 people”, “after 80 people”——カンボジア難民の 2 つの波

Mortland（2002: 153）によれば，今日，アメリカの住民の 2,000 人に 1 人が，カンボジアから移住してきた人およびその子孫であると言われる。2000 年の国勢調査（United States Bureau of the Census 2004）によれば，アメリカにおけるカンボジア系人口は，アジア系のみの人種として回答した人が，17 万 8,043 人（全米人口の 0.06%），他の人種などを含んだ混血者としての回答者が 21 万 2,633 人（同 0.08%）に上る。現在アメリカに暮らすカンボジア人の大半は，他のインドシナ諸国の人々——ヴェトナム人，ラオス人，モン族などと同様，ヴェトナム戦争をはじめとするインドシナ半島における戦乱，

国家の社会主義化などを契機として，1970年代半ば以降にアメリカに入国した人が大半を占める。アメリカに住むカンボジア人のうち，アメリカ国外で出生した人の割合は65.8％で，そのうち1980年より前に入国した人は，アジア系グループの中でも最も低い値である約10％であった。その後，1980年～1989年に73.9％の人が，1990年～2000年には，16.1％の人が入国している。すなわち，カンボジアが内戦状態であった1980年代に入国した人が集中しているものの，その後も結婚[6]や家族呼び寄せ制度などによって継続して移住者がいることが分かる。

アメリカにおけるカンボジア人移民社会の歴史は，そう古いものではない。アメリカに初めてカンボジア人移住者が渡ったのは1953年のこととされ，Coleman（1987: 362–363）によれば，ポル・ポト時代以前は，外交官やその家族，留学生などを合わせても数千人を超えなかったと言う。1970年初頭のロン・ノル政権は，共和派の親米政権と言われ，カンボジア＝アメリカ政府間の協定により，新政権下での人材育成のため，特に工業，軍事などの分野のカンボジア人留学生を，アメリカに送りだした。中でも，ロサンゼルスのロングビーチに留学した者が多かったという。その後，クメール・ルージュが首都を占拠した1975年時点でアメリカに渡った初期の難民の多くは，アメリカに親類を持つ者や，当座の自己資金のある都市出身のエリート層であった。この第1波の難民の人々を指して，“the 75 people”と言う（Needham and Quintiliani 2007: 37）。それ以降1980年までにカンボジア人難民が次々に到着するようになっていたが，その数は，16,000人程度であった。しかしポル・ポト政権の崩壊以降，難民の数は急増し，1986年までに125,000人が入国し，その後数年のうちに，さらに数千人が到着した（Coleman 1987）。1980年以降にアメリカへ難民として渡ったカンボジア人の大多数は，農村部の農民層であったと言われ，“after 80 people”と称される（Needham and Quintiliani 2007: 37）[7]。前者の“the 75 people”が，都市の中・上流階級出身者を中心とし，カンボジアに在住当時からフランス語や英語の素養があり，比較的都市的なライフスタイルに慣れていたのに対し，後者の“after 80 people”グループの多くの人は農村地域出身で，英語の習得や，アメリカ社会への同化に苦労したと言われている（Coleman 1987; Needham and Quintiliani 2007: 37）[8]。

4.2. アメリカ政府の分散居住政策と相互扶助組織の設立

当初アメリカに到着したカンボジア人難民は，ロングビーチ市にある米軍基地などに収容された。アメリカ政府は，1960年代にキューバ難民の多くが，マイアミを中心とする南フロリダに集中して定着したことによって起きた社会的影響を考慮して，ヴェトナム，カンボジアをはじめとするインドシナ難民には異なる政策で臨もうとしていた（Coleman 1987: 363）。そこで政府はインドシナ難民を保護するとともに，一都市に社会保障のための過剰な負担が集中したり，民族的飛び地（ethnic enclaves）が発展するのを

防ぐため，また難民のなるべく早い経済的自立を促すよう，分散居住政策（Cluster Project）を実施した。カンボジア難民は，一時的な施設で同化へのトレーニングを受けた後，アメリカ社会への同化を手助けし，責任を負う「スポンサー」が見つかると，当時非熟練労働の雇用機会が豊富にあると考えられたオハイオ，テキサス，ポートランド，オレゴンなど全米の各中小都市へと移住した。（Needham and Quintiliani 2007: 38–39）。その後，アメリカ国内における第1次移住先での生活が落ち着き，情報が入るようになると，カンボジア系住民はアメリカ国内で第2次移住するようになった。すなわち，広大な全米の中でもカリフォルニア州のロングビーチ市や，マサチューセッツ州のローウェル市など特定の地域に集住するようになった（Mortland 2002: 154）。

前述通り，カンボジアを含めインドシナ難民の第1波は，1980年以降アメリカに到着した第2波以降の難民に比べ，都市出身者が多く教育を受けた経験があり，他国の文化についての知識を持っていたことから，比較的アメリカ社会へ同化しやすかったとされる。また当初はインドシナ難民の人数も少なく，比較的手厚い社会保障が受けられた。しかし，増え続ける難民に対し，アメリカ政府は1980年，新しい難民法を発令し，それ以後に渡米した難民に対し，到着後受けられる社会保障サービスの期間の短縮など金銭的援助を縮小し，より厳しい態度で臨んだ。また政府は，公的機関として難民定住局（Office of Refugee Resettlement; ORR）を設置し，それまで各州に無制限に分配してきた社会保障サービスへの資金を，州ごとに限度額を設けるようになった。ロングビーチのようにインドシナ難民の多い地域では，1人当たりに分配される金銭的援助はより限られたものとなっていった（Needham and Quintiliani 2007: 38–39）。

ORRの設置と同時に，1980年には地域の需要を汲み取り，分散居住政策を支えるものとして，相互扶助組合（Mutual Assistance Associations; MAAs，以下，MAAsと記す）が分離居住政策対象の各地域に設立され，定住支援の実施機関として，政府からの資金受け入れ先となった。MAAsは，一般的にはコミュニティ内で最も教育レベルの高いメンバーによって組織され，地域の需要を把握すると共に，連邦政府の様々な機関のプロジェクトを受け入れる代理人となった。中でもロングビーチの2つのMAAs――Cambodian Association of America（CAA）[9]，United Cambodian Community（UCC）[10] は，ORRからも職業訓練や精神保健，その他様々な定住プログラムの実施組織として，全国レベルでの模範的相互扶助組織と見られた（Needham and Quintiliani 2007: 39）[11]。Yamada（2006）によれば，CAAとUCCは一般的なMAAsと同様，カンボジア系の中でも，都市出身のバックグラウンドを持つ，富裕層の教育レベルの高い人々によって組織された。そして，皮肉にもMAAsの導入によって，カンボジア本国の伝統的な支配構造と同様の社会階層による権力構造が，社会保障プログラムをコントロールし，提供する側と，それを受ける側との立場の差異から，ロングビーチのコミュニティ内に再構築されたという（Yamada 2006: 221）。

4.3. ロングビーチ市への集住化

ロングビーチ市は，ロサンゼルス郡内の中心ロサンゼルス市の都心（ダウンタウン）から南に約 30 km の場所にある港湾都市である（地図 1 参照）。主要な産業として，港湾業，航空産業などがある。ロングビーチ市からダウンタウンまで電車（メトロレール・ブルーライン）が通り，公共交通機関を利用しても約 1 時間で行くことが出来る（車では約 30 分）。同市は，カリフォルニア州で 5 番目，全米で 32 番目に大きな規模の都市であり，面積は 52.3 平方マイル，人口約 46 万人（2005 年）を擁する。年間平均世帯収入は，43,746 ドルで，2004 年の失業率は，6.1%（2005 年）である[12]。

現在，ロングビーチ市およびその周辺には，カンボジア国外で最大のカンボジア系コミュニティがあり，全世界に散らばるカンボジア移民社会の中心地となっている。1980 年代，ヴェトナム寄りの社会主義体制を採り，西側諸国との交流を絶っていたカンボジア政府の状況を鑑みるに，主に西側諸国に離散している難民社会をつなぐ中心地がカンボジア国外に必要であったことは想像に難くない。では，なぜロングビーチ市がアメリカ，あるいは全世界の移民社会におけるカンボジア人の「ホーム」とまで言われるようになったのであろうか。その理由としてよく挙げられるのは，ロングビーチ市の温暖な気候がカンボジアのそれに近いというものである。実際に，ロングビーチ市当局によって計画的に街路樹として植えられている椰子の木が並ぶ景観は，カンボジアの農村の景観のシンボルであるともいえる砂糖椰子の木立とも共通するものがある。しかし，Needham and Quintiliani（2007: 30–31）は，研究者や記者，カンボジア系コミュニティのメンバーの発言をまとめた結果，ロングビーチのカンボジア系コミュニティが発展した気候以外の理由として，以下の 3 点を挙げている。第 1 に難民としてアメリカにやって来た多くの新参者の「スポンサー」となったカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）[13] のカンボジア人学生達の存在があったこと。第 2 に，南カリフォルニアの中でも，ロサンゼルス郡は，日系，中国系などのアジア系人口が従来から多く，カンボジア人にとって親しみやすく快適な場所だったこと。第 3 に港が近く，太平洋の西側から来るアジアの食材や雑貨が比較的安く手に入りやすかったこと，そして社会保障手当てが充実していたことを挙げている。

ロングビーチ市には，1975 年に難民が到着する以前，1970 年代にアメリカに留学し，そのまま仕事を見つけ在住している 10 家族程度のカンボジア人がいた（Needham and Quitiliani 2007）。しかし，当時はこうしたカンボジア人同士の間にそれほど強いネットワークはなかったという。その後，ロングビーチ市では，難民の受け入れを契機として，前述のような CAA や UCC などといったカンボジア系相互扶助組織が活躍するようになる。Needham and Quintiliani（2007: 40）が様々な論文からロングビーチに居住するカンボジア系人口（自然増も含む）に関する記述を集めたところ，推計で，1981 年には，8,000 人，1982 年には，11,250 人，1984 年には，20,000 人，1992 年には，約 3 万人のカ

ンボジア系アメリカ人が集住するようになった。2006 年には，約 5 万人いるとも言われている（岡崎 2006: 255）。さらに実際には，フレズノ（Fresno）や，ストックトン（Stokton）などロングビーチ市の周辺にもカンボジア人の集住地があることから，これらの周辺地域も「ロングビーチのカンボジア系コミュニティ」に含めるとさらに人口は増えるものと考えられる。しかし次第に集住化が進む一方で，アメリカ政府が実施してきた分散政策との軋轢を抱えるようになった。CAA は，ロングビーチへの 2 次移住をしようとする人々にこれ以上ロングビーチに集まっても職が無いと警告し，移住を止めようとした（Needham and Quitiliani 2007）。

4.4. ロングビーチ市における民族的多様性とその対立

ロングビーチ市史についてまとめた Hillburg（2000）によれば，同市では，カンボジア人をはじめとするインドシナ難民が同市に移住する以前の 1960 年代から，市内のマイノリティ・コミュニティが目覚め始め，住民の人種・民族の多様化が一気に進み，アメリカ国内でも最も多様なエスニック・コミュニティで構成される都市のひとつへと変化した。現在市内には，アフリカ系，ラティーノ，日系，カンボジア系，南ヴェトナムからの少数の難民による各コミュニティが存在する（Hillburg 2000: 122–123）。表 1 は，ロングビーチ市の人種別・民族別の人口変動についてであるが，元々全米平均（75%）に比べ少なかった白人の割合がますます減少し，数の上では，ヒスパニックが勝るようになっている。ヒスパニックは，スペイン語話者という意味であるが，ロングビーチを含むロサンゼルス郡は，メキシコの国境近くに接しており，実際には，メキシコ系を中心とするラテン・アメリカ系住民（ラティーノ）が大半を占める。

中でも，ロングビーチ市のダウンタウンから北方にメトロで 3 駅の距離にあるアナハイム・ストリートは，第二次世界大戦以来，アフリカ系やラティーノなどの新参者や移民が定着する場になっていた（Hillburg 2000: 124）。カンボジア系住民がビジネスをするまでは，さびれた通りで地価も安く，新参のカンボジア人達は不動産を手に入れやす

表 1　ロングビーチ市の人種別・民族別人口変動（1990 年～2000 年）

	1990		2000	
	人数	割合	人数	割合
白人	212,755	49.50%	152,899	33.10%
黒人	56,805	13.20%	66,836	14.50%
アジア系	55,234	12.90%	54,937	11.90%
その他	N/A	N/A	21,758	4.70%
ヒスパニック	101,419	23.60%	165,092	35.80%
総人口	429,433	100%	461,522	100%

【出典】：ロングビーチ市公式ホームページより筆者作成
http://www.longbeach.gov/civica/filebank/blobdload.asp?BlobID=10106

かった（Needham and Quintiliani 2007: 36）。1980 年代からビジネスを展開し始めると，カンボジア人の難民としての優遇措置を快く思っていなかった従来から居住する他のエスニック・グループの住民との間に軋轢が生まれるようになった。1987 年には，同地域の貧困，ギャング，そして暴力についての記事も地元紙に見られるようになる。1989 年から 1995 年にかけてラティーノや黒人の若者とのストリートや学校における抗争が最高潮に達した。一時は，カンボジア人の若者 700 人が 5 つのギャング集団[14] に分かれて日夜闘争を繰り広げていたという。彼らは，同じエスニック・グループであるカンボジア人のビジネスにも脅しをかけて金銭をゆすったり，対立するエスニック集団をターゲットとした住宅侵入強盗をしてますます多くの稼ぎを得るようになっていた。ギャング集団によるストリートでの無差別な犯罪が激化するにつれ，あらゆる民族的背景を持つ人々は，同一のネイバーフッドという場で，共通の恐怖に慄くようになった。こうした状況に耐えかねたカンボジア人の商店主たちは，ついにアナハイム・ストリートの店を一斉に終日閉じ，暴力に反対するボイコットを行った。その際，ラティーノ・コミュニティや黒人のコミュニティからの協力も得て，「我々はキリング・フィールド[15] からやって来て，また別のキリング・フィールドに行くのか？」といった 150 のプラカードを示した（Needham and Quintiliani 2007: 45–46）。大多数の住民がギャングの被害者であり，地域にとって共通の負の経験が，人々の共に居住する場への意識を再喚起したと言えよう。

またカンボジア系住民にとっての負の経験として，他のエスニシティの住民からの攻撃があった。当初アメリカ社会への定着の第一歩となる言語や職業訓練を希望する者は多く，市当局よりロングビーチ市立コミュニティカレッジを通じて様々なプログラムが提供されたが，通学の際に，他のエスニック・グループの人に投石をされるなどして恐怖を覚え，中途退学する人が多かった。さらにポル・ポト時代のトラウマの影響か，不眠や頭痛に悩まされる中で記憶力に限界を感じ，中途退学する人も多かった。

一方，カンボジア本国では，1991 年のパリ和平協定締結により，内戦終結へ向けた政府側と反政府側各派との合意形成がなされた。その後，国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による統治の時代を経て 1993 年には内戦後初の総選挙があった。祖国の再建のために，先進国アメリカでの経験を生かしたいと，カンボジア人コミュニティのリーダー約 20 名がカンボジアに渡った。しかし，リーダー達が不在になった後，コミュニティの組織は弱体化し，1996 年にはコミュニティのシンボルであった UCC の入った建物を売り払わねばならない事態にまでなった（Needham and Quintiliani 2007: 47）。

4.5. 今日のカンボジア系住民の全体的社会経済状況

ロングビーチ市のカンボジア系住民に限ったデータは，今次の調査では入手できなかったが，アメリカ全土におけるアジア系住民[16] に関する国勢調査統計（2000 年）

（United States Bureau of the Census 2004）によれば，カンボジア系住民の経済状況の水準は，全米の平均より低い値が多く，大多数の人々が厳しい生活状況にあることが伺える。就業統計では，カンボジア系，モン系，ラオス系の管理・専門職の従事者割合は全従業者の 20％を下回るが，一方で製造・運輸業の従事者は，35％を超え，大半の人々がブルーカラーの職種についていることが伺える。すなわち，管理・専門職従事者の割合が全米平均（33.6％）よりも高いインド系，日系などの他のアジア系グループとは，異なる就業パターンを示している。またカンボジア系の平均世帯年収は，山岳少数民族であったモン族とほぼ並んでアジア系の中でも 2 番目に低い 35,621 ドルであり，全米平均の 50,046 ドルと比較するとかなり少ない。しかし一方で，カンボジア系住民の一部には，ドーナツ屋[17] や，車の修理業，宝石販売業[18] など特殊な分野に集中することで，カリフォルニア州や，マサチューセッツ州を中心に，小規模なビジネスを興し，エスニック企業家として成功する者も現れている。これらの成功した親戚を頼ってロングビーチに来る人々もいる。また他のアジア系マイノリティと同様，2 世，3 世の中には，高等教育を受け，専門職に就く者も増えている。後述するように，これらの成功者達は，アナハイム・ストリートの周辺から，ロングビーチ市内の中でも富裕な居住区へと転出していく傾向がある。

5 ロングビーチ市における「カンボジア・タウン」の誕生

5.1. 2007 年 7 月 3 日――「カンボジア・タウン」の誕生

アメリカ政府の分散居住政策により，全米各地に居住するカンボジア系住民の中心地であったロングビーチの地に，2007 年 7 月 3 日，ついに「カンボジア・タウン」が，ロングビーチ市議会の Housing and Neighborhood 委員会で公式に認められた文化的／歴史的区域として誕生した[19]。市内には，多くのエスニック・マイノリティ・グループが居住するものの，これまで市議会で公式に認められたエスニック地区は他に存在せず，市当局としても初の試みであることが伺える。「カンボジア・タウン」の形成を目指す運動は，2001 年よりすでに始まっていた。ロングビーチ市のカンボジア系住民は，同コミュニティのリーダー，様々なカンボジア系の協会，組織と協力してコンサルタント会社として，「カンボジア・タウン社」（Cambodia Town. Inc.）を結成し，アトランティック通り（Atlantic Avenue），ユニペロ通り（Junipero Avenue）間のアナハイム・ストリートの区画（東西に約 2.4 キロの道）を公式に「カンボジア・タウン」と名づけることを要望する提案書をロングビーチ市会議に提出することを目指した。一度は市議会で提案は取り下げられたものの，同社は「カンボジア・タウン」設立への合意形成に向けて，ロングビーチ市の各エスニック・グループ内の代表の支持を取り付けるべく努め，再度提出の後，2007 年 7 月 3 日の承認に至った。「カンボジア・タウン」は，ロサンゼルス郡

内の他のエスニック・タウン同様，リトル・プノンペン，リトル・カンボジアなど複数の呼び名を持って来た。しかし，公式名称を「カンボジア・タウン」とした理由について，カンボジア・タウン社は，我々は決して，「リトル・プノンペン」といったカンボジア国内の限られた地域の出身者によるグループを代表するのではなく，カンボジア系アメリカ人というのは，カンボジア国内の様々な地方の出身者の人々から構成されていることを尊重し，全ての在米カンボジア人を代表する名称をつけたかった，としている。尚，カンボジア語では，「クロン・クマエ」（クロン＝都市，クマエ＝クメール）という公式名称になる（カンボジア・タウン社公式ホームページ）。

ロングビーチ市ダウンタウン[20]の約2キロ北方のアナハイム駅を降りてすぐ，東西に伸びるアナハイム・ストリートの東側の一部分――カンボジア・タウンとされる比較的大きな通り（4車線）沿いには，カンボジア系住民を主な客とする大型の複合型店舗（スーパーマーケットや歯科医院など）や，宝飾店，服飾店，レストラン，歯科医院，自動車修理工場などが立ち並ぶ（写真1～7参照）。一方，ラティーノのレストランやスーパーマーケット，酒店も，カンボジア系の店舗に比べて規模の大きなものは少ないものの，交互に立ち並ぶ。また他のアジア系住民，とくに文化的にも共通性のある東南アジア大陸部のタイ系，ヴェトナム系，モン系の人々もカンボジア系に比べると少数ではあるが通りの近辺に居住，あるいは店舗や寺院，教会などの利用のため訪れる。

5.2. カンボジア・タウン副会長の見るカンボジア・タウンとカンボジア系住民

カンボジア・タウンの会長（Ms. Sithea San），副会長（Mr. Richer San）は共にロングビーチ市内にあるカリフォルニア州立大学ロングビーチ校の出身で，同校のCambodian Student Society（CSS）の設立メンバーであったという。また，彼らは夫婦であり，カンボジア系アメリカ人資本として初の銀行[21]を，アナハイム・ストリートの近くに設立した企業家でもある。副会長であるSan氏（43歳，男性）への筆者のインタビュー（2007年10月20日，ゴールデン・コースト銀行にて，使用言語：カンボジア語，英語）結果を以下にまとめる。

〈San氏の略歴およびカンボジア・タウンの概要について〉

カリフォルニア州立大学には，ロングビーチ校以外にも，ロサンゼルス校，フレズノ校などがある。そのうち，ロングビーチ校のカンボジア人学生組合が最も大きい。CSSは1986年に創設され，San氏はその設立メンバーの1人であった。同氏は，1964年に首都プノンペンで生まれた。13歳までカンボジアにいたのでカンボジア語が話せる[22]。その後，1979年，15歳の時にアメリカに到着した。13歳から15歳の間も（難民キャンプにいたため？），カンボジア語の世界にいた。英語も流暢に話せるが，同じくカン

ボジア語を話せる妻との会話には，ほとんどカンボジア語を使用している。1996年から2001年にかけては，カンボジアに戻り，米の精米業の支援，中小企業の活性化事業などカンボジアにおけるビジネスの再建をすべく，様々な仕事をした。しかし，カンボジアにいると時折クメール・ルージュ政権時代の凄惨な記憶が甦り，身の毛がよだつような恐怖感を覚えた。近年も年に数回カンボジアに行くが，アメリカを中心に活動している。

現在，カンボジア・タウン内には，宝飾店，レストラン，旅行会社，食料品店，ギフトショップなどがある。ロングビーチのカンボジア系コミュニティと宗教について，アナハイム・ストリートには，教会（New Life Church）が1軒ある[23]。ロングビーチには，60〜80軒の仏教寺院（写真8参照）がある[24]。カンボジア系コミュニティにおいて，仏教寺院は，ソーシャル・センターとしての役割も負っている。たとえば，幼稚園の併設や，カンボジア語の無料のクラスなど。ロングビーチのカンボジア系住民の10％〜15％が，キリスト教徒である。キリスト教徒と言っても，カトリックの中だけでも，モーメントや7daysといった様々なセクトに属するので，会派はバラバラである。会長副会長夫妻自身は，上座部仏教徒であるが，会長の叔母は，アングロサクソン系との結婚を機に，相手に合わせ，カトリックに改宗した。若い世代は，結婚すると相手に応じてカトリックなどに改宗する傾向がある。また若い世代の20％は，人種を超えて結婚する。年配のカンボジア人女性も，離婚すると他の人種の人と再婚する傾向がある。

〈アナハイム・ストリートがカンボジア・タウンであることを示すサインについて〉

カンボジア・タウンは，2007年7月に公式に認定されたばかりなので，まだ様々なことが準備中である。カンボジア・タウンへのゲートウェイであるアナハイム・ストリートの東側と西側に，アプサラ（泡から生まれた水の精；天女）の彫刻を施した高さ10フィート（約3m）のポールを建てる予定である。中華街の牌楼門のような門ではなく，柱として建てようと考えている。

カンボジア・タウンが，公式に認められるまでの詳しい経緯については，公式ウェブサイトに掲載したので，それを参照して欲しい。最初に，2006年10月にカンボジア・タウンの案を提出したときは，市議会で認められなかった。しかし再度提出し，2007年7月3日に議会の承認を得て，公式に誕生した。

〈カンボジア・タウン設立の目的〉

カンボジア・タウン設立の目的は，第1に，文化や遺産の保護の促進。第2に若い世代にカンボジア系であることのプライドを持たせるため，第3に地域の経済的発展のためである。アメリカには，きちんとした都市計画があって，ゾーンニング分けが明快である。カンボジアでは，こうしたゾーンニングがまだ遵守されていない。カンボジアに

帰国した際，都市開発の乱雑ぶりに驚いた。今後，カンボジアにも都市計画をする上で，きちんとしたゾーンニングが必要である。たとえば，アナハイム・ストリートは，商業地域とされている[25]。我々は，住宅街をカンボジア・タウンにはしない。地区の性格としては，文化とビジネス地区であると認識している。

〈カンボジア・タウンが成立して以後の変化〉

カンボジア・タウンに制定されたから数ヶ月しか経っていないため，まだあまり大きな変化はない[26]。しかし，休日になると南カリフォルニア圏のカンボジア人を中心として，観光客などが大勢訪れる。週末（金，土，日）の夜には，カンボジア・タウンのレストラン[27]は，結婚式の予約でいっぱいになる。

カンボジア・タウンの会長の親戚には，フランス在住者も多数いるが，在仏カンボジア系の人々曰く，フランスにもカンボジア系住民が多数いるものの，ロングビーチのように，「カンボジア・タウン」を形成できるような社会状況ではない，と言う。こうした意味でも，アメリカには自由がある，と San 氏は語る。

尚，カンボジア・タウンの設立後，カンボジアのシハヌーク元国王，および現シハモニ国王から，祝辞のレター（英文）が会長のもとに届いた。以下は，San 氏の行動と筆者の解釈になるが，カンボジア・タウンのウェブサイトにも掲載されていると話しながら，San 氏は，インタビューの場でプリントアウトし，筆者に渡したことから，同氏にとってこれらのレターは，大きな意味を持つものだと考えられる。双方のレターには，「愛国的」（patriotic）の文字がある。現国王は，「愛国的精神」を持つロングビーチのカンボジア系コミュニティの努力への賛辞と市議会による承認の祝辞を述べ，元国王は，ロングビーチのカンボジア系コミュニティの「愛国的活動」についてのレポートの送付に対する感謝の意を述べられている。カンボジア・タウンの形成に際して他のエスニック・グループの承認だけではなく，カンボジア本国の絶対的存在からの承認を受けたことが大きな自信となっているように伺えた。

〈近年，カンボジア母国から新たに来るカンボジア人は，増加しているか〉

あまり把握していない。ロングビーチのカンボジア系コミュニティの多くは，難民として入国した人が大半を占める。近年難民の家族呼び寄せ制度などを不法に利用して，アメリカに渡って来る人々もいる。

〈カンボジア系の集住地区について〉

ロングビーチ市内におけるカンボジア系住民の集住地区は，いくつかある。カンボジア系コミュニティ内の平均的世帯収入を持つ人々の居住する地区として，アナハイム・ストリート周辺，ノース・ロングビーチ（市内北方）が挙げられる。またカンボジア系

の富裕層の住む主な地区として，アナハイム・ストリートの北にあるシグナル・ヒルがある（写真 9 参照）。さらに，数は少ないが，若い専門職従事者を中心に，市内南部のダウンタウンにある海岸沿いの高層コンドミニアムに住む者も出始めている。

〈ジャパン・タウンの計画〉

今後，関心のある事業のひとつに，カンボジアにおける「ジャパン・タウン」設立の構想がある。San 氏は，在米日系人の女性事業家や，駐日カンボジア大使の兄弟とも知己であり，これらの人々との間で，カンボジアを代表する国際的な観光都市であるシェムリアップ市において近年，日本人居住者が増加していること，日本人観光客が多いことなどに着目し，同地に「ジャパン・タウン」をつくってはどうか，という案が出ている。

5.3. 純粋性の志向と現実

カンボジア・タウンの範囲内のストリート名――アトランティック通り，ユニペロ通りなど――を見ても分かるとおり，現在のところカンボジア語のストリート名は存在しない。通路名の大半が，ロサンゼルス市，ロングビーチ市内の大多数のストリート同様，スペイン語名か英語名である。そうしたスペイン語や，英語の通り名の両端に，アン・ドゥオン（19 世紀のカンボジア国王の名前）マーケットや，リトル・プノンペン・マーケットといったカンボジアとの関わりの強い名を冠した店舗が，周辺の地域とさほど変わらぬ凡庸なあるいは小綺麗な概観の建物として並ぶ。アナハイム・ストリートは，実際には，カンボジア系住民とラティーノが交差する場でもあり，さらに少数のタイ系，ヴェトナム系，モン系といった他のマイノリティ・グループの店舗も含まれており，ヴェトナム語やタイ語の看板などもある。写真 10，写真 11 に見られるよう，共通語である英語を併記するだけではなく，カンボジア語，スペイン語もそれぞれ記載している看板もある[28]。また韓国人の経営による 99 セントショップも存在する。カンボジア人経営の店舗は，カンボジア・タウンの範囲内のみにあるのではなく，範囲外であるアトランティック通りの西側にも，ユニペロ通りの東側にもいくつか存在する。

カンボジア国内でも，レストランの経営は大抵中国系カンボジア人によるが，カンボジア・タウン内のカンボジア人経営レストランも大半は中華料理とカンボジア料理のメニューがある。カンボジア・タウンから程近くにあるカンボジア系の有名なレストラン，ラ・リュヌ（La Lune）で食事をしていると，前のテーブルに親子連れの客がいた。黒髪だったので，カンボジア系の親子だと思っていたら，彼らが精算をして席を立ち振り返ると，ラティーノの家族であった。互いに母語は違うが，身体的特徴として黒髪の人が多いため，後ろ姿からでは差異があまり分からない。カンボジア・タウンは，まだ観光地化への整備が進んでおらず，近隣圏に住むカンボジア系住民を除いてはあまり地

域外からの観光客は目立たない。しかし，ラティーノの客は，ラ・リュヌ以外のシェムリアップ・レストランなどでも見かけた。地元民かもしれない。

またCD兼衣料品店を経営するカンボジア系1世のC氏（40代，男性）は，近年のカンボジア・タウンの好景気に乗り，市内南部の1号店に続き，アナハイム・ストリートの側近く（ラ・リュヌの隣）に第2号店を出した（写真5参照）。C氏は，カンボジアとアメリカの双方に自宅を持ち，アメリカに拠点を置きながら，行ったり来たりの生活をしている。カンボジアでは，音楽プロデューサーとして弟と共にレーベル会社を立ち上げ，主に音楽CDを作成している。アメリカの店舗では，そうしたCDや他にカンボジアで仕入れてきた雑貨などを販売している。2号店開店記念セールとして，シャツを，5枚で10ドルという安価で販売しており，カンボジア人客だけではなく，黒人やラティーノなど様々な人種の客が訪れていた。一方で，カンボジア文化に固有の衣装を売る店も少なくなく，そうした店舗で他のエスニック・グループの客を見かけることは，ほとんどない。カンボジアの女性向け衣料品店では，カンボジア国内で作られた絹織物や，綿製の日用品など特殊な製品も手に入る。また普段着に関しても，首都プノンペンの衣料品店をそのまま持ってきたかのような品揃えがある店もあり，カンボジアとは気候の違いによる厚着か薄着かの差異はあるものの，高齢女性を中心に，カンボジアと同時代的なファッションが展開されている。また近年，カンボジア本国と同様に，結婚式などのパーティで着用する伝統的衣装や，洋式ドレスのための仕立屋が増加しており，カンボジア・タウンの範囲内だけで，7店舗確認できた（写真12，13参照）。ドレスの価格は，カンボジアの1.5〜2倍程度であるが，たとえば，伝統的衣装・ドレスの仕立用カタログ雑誌は，カンボジアで3ドルのものが，10ドルに跳ね上がる。

5.4. ストリートでのパレード——誇りと自信から来る場所の内在化

これまで述べてきた通り，カンボジア・タウンは，カンボジア系アメリカ人にとっての「ホーム」とされてきたが，実際には純粋なカンボジア人の空間ではなく，様々なエスニシティの人々が交差する空間である。しかし，こうした場において，カンボジア・タウンとして「名づけ」られた空間であるとの認識を，改めて実体化するイベントが年に1度実施される。アメリカのストリートという公共空間において，カンボジア系アメリカ人の場という新たなローカリティを構築するには，どのようなことが必要なのだろうか。アパデュライ（2004）は，ド・セルトーの言を引いて，近接（ネイバーフッド）とローカリティとの関係に関し，どのローカリティの構築にも，植民地化の瞬間がある，として以下のように語る。

> 端緒となる儀礼（Bloch 1986）に孕まれる暴力の多くは認識にかかわっており，それまで支配されていなかった人々や場所からローカリティをもぎとるためにはどのような力が必要とされるかをとらえようとする。言い方を換えれば，空間を場所に変容するには，意識化の瞬

> 間が――次の瞬間には，相対的に惰性的なものとして記憶されることになるかもしれないが――必要となるのである。近接の生産は，植民地化という本質を持っている（de Certeau 1984）。というのも，それは，潜在的には無秩序あるいは抵抗的とみなされる場所や舞台に対する，社会（多くの場合は，儀礼）によって編成された権力の行使をともなうからである。居住や職業，定住にまつわる儀礼の多くに不安がつきまとうのは，こうした植民地化の行為につねに孕まれる潜在的な暴力性が認識されるからである。―中略―。このように，近接の生産というものは，本質的に，ある種の敵対的もしくは抵抗的環境――もう1つ別の近接と言う形態をとることもある――に対する権力の行使なのだ（アパデュライ 2004: 326–327）。

上述の意味では，ストリートを占拠し空間を強く意識化するパレードも，とくに開始当初は，空間の場所化，植民地化するのに明示的で有効な儀礼のひとつかもしれない。ここでは，カンボジア・タウンにおける2大イベントで，毎年4月半ばのクメール正月に実施される「カンボジア新年パレード」と「カンボジア正月祭り」[29] を取り上げたい。ロングビーチのカンボジア系コミュニティでは，2000年以来，ロングビーチ市内のエル・ドラド公園などで，クメール正月を祝う祭りを開催し，共通の歴史やバックグラウンドを持つ古い友人との時間を楽しむ場としてきた。2005年のクメール正月には，ロングビーチ市当局の協力で，アナハイム・ストリートの一部分を封鎖して，新年を祝う初のパレードの実施が可能となった。しかし，市から示された日は，前述のエル・ドラド公園で新年を祝う会を開催する日に合わせた4月17日だった。この2005年4月17日，すなわちポル・ポト派がプノンペンを占拠した20年後にあたる開催日めぐって実行派と反対派に分裂し，カンボジア系コミュニティ分裂の危機に至ったとしている（Phim[30] 2007: 3, 115–125）。しかし，キリング・フィールド・メモリアル・タスク・フォースなどの団体に当初強力に実施を反対をされながらも，何度も話し合いを重ね，日程を4月24日に変更し，何とか催行にこぎつけた。最後は当初の反対者をも巻き込んでのものとなり，当日，アナハイム・ストリートは，大勢の観客で埋まった。その観衆の中にいつの間にか，かつての反対派の笑顔が見えたとき，パレードを通じてカンボジア・タウンに関わる人間の統合（unity）がより一体化したことを感じた，とPhimは言う。彼女は，第1回目のパレードの状況について高揚感を込めて，以下のように述べている。

> 私は当初，カンボジアの先住民の衣装を着て踊らなければいけないことになっていた。困惑しているところに高校生が来て，彼女の友達がそのチーム（先住民の衣装のチーム）におり，一緒に参加したいので代わって欲しいという。ほっとしていた私に，CSSの会長がチャーム人の衣装を貸してくれ，別のチームに参加した。若い男性達は，それぞれ楽しそうにサロン[31] を巻いていいたが，それは（カンボジアでは）女性物であって，男性のサロンには特別なものがあるのだと指摘した（括弧内は筆者加筆）（Phim 2007: 124–125）。

その後もアナハイム・ストリートでのクメール正月の新年パレードは，毎年開催され，2007年4月には，3回目のパレードを終えた。4回目も着々と準備されつつある。

パレードの運営は，カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の Cambodian Student Society（CSS）が中心となり，パレード実行委員会が組織されている。パレードには，同地域のいくつかのラティーノの商工会，ダンス・グループなども参加する。パレード実施の目的として，①カンボジア文化のハイライトとして，②異なる背景を持つ人々のコミュニティ内の関係の向上，③カンボジア系アメリカ人のアメリカ社会からの孤立を終わらせ，表舞台へと出るため，④カンボジア系コミュニティの統合を示すこと，を掲げている。参加団体には，MAAs を始めとする社会保障を提供する団体や，カンボジアの伝統舞踊教室，カンボジア系アメリカ人の商工会および同業者組合，さらにロングビーチ市当局に関連する様々なグループ――市長，市議会議員，バス公社，消防局，ロングビーチ＝プノンペン姉妹都市など，数多くのグループがある。カンボジア・タウンは，未だストリート名自体は，「アナハイム・ストリート」であるが，カンボジア系住民の民族衣装を着た山車が練り歩くとき，カンボジア人僧侶がストリートにおいて祈る人々を祝福するとき，そこは，アメリカでありながら，そうではない場所へと一瞬変化する[32]。

5.5. ホームとしてのカンボジア・タウン

全米各地に居住するカンボジア系の若者の中には，今日でも，ロングビーチの大学に在籍したり，職を求めるためにカンボジア・タウンの近辺にやってくる人々も多くいる。ある若者は，カンボジア自体のカンボジア文化は，自分たちにはあまり親しみがないという。むしろ，アメリカ的なコンテキストにおけるカンボジア社会の中心であるロングビーチ市に，自分たちアメリカに生きるカンボジア人にとっての，カンボジア文化の場を見出している（Needham and Quintiliani 2007: 49）。富裕層の中には，カンボジアに旅行などで渡航する人が近年増加しているが，1 世にとっては，1960 年代の古き良き時代のイメージが，その後の内戦や市場経済化の中で喪失されていることへの衝撃があり，また，アメリカ生まれの 2 世，3 世にとってはアメリカとカンボジアのあまりの文化的ギャップにより，単なる異国のように感じられるとも言われる。いずれにせよ，現在多くのカンボジア系アメリカ人にとって，ロングビーチは，自分たちの「首都」であると考えられている。たとえば，ニューヨークからロングビーチに移住したカンボジア系男性（26 歳）の以下の言葉がある。

> ロングビーチに住むカンボジア系アメリカ人として僕が考えるに，ここはホームなのだ。我々はここをホームだと思いたい。ここ（カンボジア・タウン）は，最も大きくて，そして誇りに思える何かなのだ。我々がしていること全て――ロングビーチを誇りたい。我々には，多くのカンボジア人が住まう町がある。ロングビーチが象徴するのは，アイデンティティに関する何かだ。ここは，豊かなコミュニティなどではなく，労働者階級のコミュニティだが（Needham and Quintiliani 2007: 49）

6 消費資本主義とエスニック・タウンのテーマパーク化

原尻（2000: 128）は，「アメリカにおけるコリアンタウンは，コリアンの移民たちが，自らの生活のためにつくりあげていった街であり，基本的にはコリアンのためにある。ところが，川崎のコリアンタウン構想は，ここにお客を呼び，それによって地域社会を発展させようという，いわば地域興しのための方策である。」と世界における各コリアンタウン形成の性格の違いについて記している。近年，日本におけるエスニック・コミュニティでは，大阪府生野のコリアンタウンのように元々あった集住地区を，商業化，観光地化するような試みが盛んになってきているが，それだけには留まらなくなってきている。すなわち，世界のチャイナ・タウンに見る街路を特定の地区として改めて表象し，商業化した成功から，元々の集住地区の存在しない場所にも，商業目的を前提とした「エスニック・タウン」を建設する動きが出てきている。ある意味では，チャイナ・タウンの観光地あるいは飲食店街としての成功モデルがパッケージ化され，容易に他所にも設置可能なものなのではないかと考えられ始めているのではないか[33]。

たとえばドイツでは，元々中国人居住区が無かった場所にチャイナ・タウンを新たに築く構想がある。

> 他の欧米諸国に比べ，学費の安いドイツへ留学する中国人学生は，年々増加し，2001年当時と比べ倍増（3万人）に達している。こうした中で，「チャイナ・タウン」構想は，ベルリン北郊オラニエンブルク市（人口約4万）で浮上，80万平方メートルの旧ソ連軍基地跡地に5億ユーロを投じて中国料理店や寺院，東洋医学所などを建設するというものだ。第二次大戦前，北部ハンブルクに存在した中規模の中国人地区が，ナチスの手で壊滅させられる歴史があっただけに，国内の中国系住民（約8万人）の関心は高い。構想の旗を振るハンスヨアヒム・レーズィケ市長（53）は「中国風家屋やミニ紫禁城も作り最大2,000人の中国人に住んでもらいたい。ここを中国に関する欧州での『ショーケース』にする」と意気込んでいる（産経新聞2007年10月23日より抜粋）。

一方で，同記事内には，ドイツの大学職員の談として，「世界各地のチャイナ・タウンは自然発生的にできたものが多く，『人工的に街を作っても成功しない』との懐疑論もある」と指摘しているが，全般的には，隣接のベルリンにとっても新たな“観光の目玉”となるだけに，構想への期待が大きいとしている。この「チャイナ・タウン」構想は，軍基地の跡地であるため，すでに先住者がいたカンボジア・タウンとは異なる，テーマパーク的なものであると言える。ただし，そこによりリアリティを感じさせるために，居住者を求めるのだとしたら，そう簡単ではないだろう。

カンボジアにおいても，2003年，シェムリアップ市郊外にエスニック・カルチャーを売り物とした初の観光テーマパーク「カンボジア文化村」（*Phum Voapphatoa Khmae*）が誕生した（写真14〜19参照）。シェムリアップは，近年世界遺産であるアンコール遺

跡群を擁する国際的な観光地として目覚しく発展を遂げており，海外からの観光客だけではなく，国内観光客も急増している。広大な敷地を持つ同村内には，カンボジアの歴史を蝋人形で示した博物館や，国内に居住する各民族グループの家屋を中心とした生活様式や民族舞踊を紹介する 11 の「村」；クメール人，チャーム人，中国人，山岳少数民族の村などがある。一方で，「漁民の村」（漁民の多くは，ヴェトナム人）はあるものの，「ヴェトナム人の村」はなく[34]，ここはカンボジア社会の完全なる縮図ではなく，「誰か」にとっての都合のよい理想のカンボジア社会であることにも気づかされる。ここは，雑多な人びとの往来するようなストリートではなく，意図的に造られた空間なのである。かといってディズニーランドのような夢の国でもない。カンボジアの「歴史博物館」の最後の展示は，UNTAC（国連暫定統治軍）の兵士が，歓楽街で遊んでいる姿の蝋人形で締めくくられている。

一方で上述の 11 の「村」の中には，カンボジア国外における「カンボジア人」であるクメール・スリン（東北タイのクメール人）や在外カンボジア人の村（その代表例としてアメリカ在住者の生活を展示）もある（写真 17，18 参照）。近年カンボジアの国内旅行が盛んになる中で起きている山岳少数民族の文化の観光資源化だけではなく，マジョリティであるクメール人の村もあり，自民族に伝わる伝統的踊りや，19 世紀のクメール人富裕層の結婚式を再現したショーには，カンボジア人の親子連れで立ち見が出るほどであった。尚，カンボジア人の入場料は，約 1 ドルであるが，外国人の入場料金は，10 ドル程度と高価なこともあってか，外国人観光客の姿はあまりない。客の大半は，カンボジア人あるいは，国外のカンボジア人コミュニティから帰国した人々である。

7 終わりに

ロングビーチ市のカンボジア人コミュニティは，アナハイム・ストリートを中心に，カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の学生組織およびその出身者を中心とするカンボジアの伝統的な都市部エリート層出身者を中心とした強力なリーダーシップの元に統合されてきたと考えられる。1980 年代末から 1990 年代半ばにかけては，従来から居住するアフリカ系アメリカ人，ヒスパニック系住民との対立が激化したが，その後アナハイム・ストリートを，「カンボジア・タウン」と名づけるまでの道程には，市当局や他のエスニシティの政治的リーダーの了解を得つつ周到に進められた。カンボジア系コミュニティ内部にあっても，アナハイム・ストリートに店を構える他のエスニック・グループとの軋轢をこれ以上望まない人や，カンボジア系移民コミュニティ内部での主導権の問題などへの反発などもあったと聞かれるが，今次の調査では，カンボジア・タウン社およびカンボジア・タウン内のカンボジア人居住者のみを対象としたため，他のエスニック・グループが抱える意識の詳細等より踏み込んだ調査について

は今後の課題としたい。

本稿での分析を通じて，公的な「カンボジア・タウン」の誕生には，内部に向けた目的と外部に向けた目的とがあるのではないかと思われた。コミュニティの内部に向けてはアメリカ国内の，また世界に散らばるカンボジア人ディアスポラの精神的支柱として――すなわちこれまで存在してきたコミュニティ内部の様々な分裂――移民の時期の違いや，出身地や経済的状況を超える統合の象徴としての「場」の希求である。これは同時に，難民としてアメリカに一時的に渡って来た人々が，母国の政治情勢が安定化し，帰国の可能性も出てきた今日，2世，3世がアメリカ社会に溶け込む中で，1世にとっては，改めて自らが選択的にロングビーチに住むことを捉えなおす作業であるかもしれない。また同一の文化的背景を持つとされる「エスニック・タウン」も，実際には紐帯を目指す過程において，母国における様々なグループ間の対立をより先鋭化した形で抱え込むことから，ある意味では国民国家の枠組みを引き摺る「ナショナル・タウン」であるとも言える。

しかし，一方でカンボジア系コミュニティ外部の他のエスニックマイノリティ・グループ向けには，カンボジア系住民が集住することで，アメリカ合衆国の予算からロングビーチへの職業訓練や社会保障のプロジェクトが舞い込みやすくなること，また他民族が居住するのを承知した上でも，「カンボジア・タウン」という「名づけ」をストリートに付与することで，名がない状態よりもはるかに他の地域からの客が呼び込むことが可能となり，地域経済の活性化になることを訴えている。さらに，自らの町を改めて名づける意識化の作業を通じて，住民がより地域に対する責任感を醸成することになるとしている。

1980年代，インドシナ難民が大量にアメリカに流入した際，アメリカ政府は難民の集住による民族的飛び地の形成を防ごうと分散居住政策をとった。しかし，今，都市再開発の流れと移民の母国の市場経済化の影響や母国との往来の増加などによる移民社会の活性化によりエスニック・コミュニティの評価は，新たな局面を迎えている。たとえば，エスニック・ビジネスの発展により，「エスニック・タウン」の形成は，公からも認知されつつある。一方で，カンボジア・タウンのように，近年公的に認められるようになってきているエスニック地区の多くは，あくまで居住地域ではなく，商業地域に限られており，範囲もごく限られている。行政にとっては，この上からの承認を含めた「名づけ」が，かつて心配していたような「民族的飛び地」化するよりも，むしろ風通しのよく，明示化された把握しやすい存在への変化と受け止められるようになっているとも考えられる。上からのトランスナショナリズム，下からのトランスナショナリズムという「上・下」の方向性とその対立だけでは，説明のつかない現象が起きている。

現在は十分に観光化されておらず，バラバラな雰囲気のカンボジア・タウンが，5年後，10年後には，どのような姿に変化するのだろうか。ストリートという誰もが行き

交う場を，「エスニック・タウン」と名づけるには，人々の合意を形成する上で，経済的効果が有力であるということを挙げた。カンボジア・タウン社の副会長は，「我々は，住宅街をカンボジア・タウンにはしない」と語っていたことを考えると，公的な「エスニック・タウン」とは，あくまで「日常」とは少し離れた距離を置ける場でなければならないのだろうか。

（写真 1〜写真 13：2007 年 10 月，アメリカ合衆国ロングビーチ市アナハイム・ストリートおよびその周辺で筆者撮影）

（写真 14〜写真 19：2006 年，カンボジア王国シェムリアップ州にて筆者撮影）

謝　辞

本研究の基となるアメリカ合衆国ロサンゼルス郡におけるフィールド調査（2007 年 10 月）の実施は，文部科学省研究費補助金　基盤研究 A　海外学術「トランスナショナリズムと『ストリート』現象の人類学的研究」（代表　関根康正）の海外調査費助成により可能となった。ここに記して感謝の意を表したい。

注

1) アメリカにおいて 1960 年代の黒人を中心とする公民権運動に刺激され，エスニック・マイノリティの自己主張が強まった現象（明石・飯野 2004: i）。
2) 中国系アメリカ人博物館（http://www.camla.org/）。
3) 全米日系人博物館（http://www.janm.org/jpn/main_jp.html）。
4) カンボジアにおける「反ヴェトナム人感情」の形成過程および実態については，天川直子（2003）「カンボジアの人種主義――ベトナム人住民虐殺事件をめぐる一考察」武内進一編『国家・暴力・政治――アジア・アフリカの紛争をめぐって』研究双書 No. 534，独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所，pp. 109–145 に詳しい。
5) プノンペンには，中国系住民の集住地区はあるものの，クアラルンプールやバンコクといった他の東南アジアの主要都市に見られるような観光地化された「チャイナ・タウン」としての他者への演出はほとんど見られない。同郷会館や華人学校，冠婚葬祭の用具店など生活に必要な施設が中央市場や他の主要ないくつかの市場周辺に集い，その周りに中層の住居があるだけである。中秋節の際には月餅が一斉に売られ，2 月の中国正月には爆竹が鳴り響く。しかし，牌楼門などのはっきりとした境界を示すものは無い。中国系オールドカマーの大半は，マジョリティであるクメール族とも通婚しているため，都市全体が薄っすらとしたチャイナ・タウンであるとも考えられる。
6) 2005 年 7 月，プノンペンの中・高級住宅街の，あるカンボジア人家庭では，アメリカで車の塗装工として働く長男（30 代）が，10 代半ば過ぎのカンボジア女性の花嫁候補に会いに戻って来ていた。2 人はすでに婚約しており，ビザなどの準備が整い次第アメリカに連れていくとのことであった。相手の女性は，シェムリアップで観光客向けにアプサラ・ダンス（天女の舞い）を披露する若い踊り手だったが，その舞台で夫に見初められたのがきっかけだという。当時は，英語学校と，アメリカでの共働きがすぐ出来るようにとネイリストになるため

の学校に通っていた。長男の妹（20代）も，機会があればアメリカ国籍を持つ男性と結婚して，アメリカに渡りたいという。今や，プノンペンに住む若い女性にとって，結婚などを機にアメリカに渡るということが，人生のひとつの選択肢となりつつある。アメリカに渡り，医療を始めとする近代的な生活様式を享受したり，現金の必要な家族への仕送りがしたいとの声が聞かれた。大学で学び英語を自在に扱える女性の中には，カンボジア系アメリカ人男性とインターネットを介して出会い，結婚を機にアメリカに移住するという人も出てきている。こうしたカンボジア系アメリカ人男性が母国に戻って花嫁探しをする背景として，前述の男性の妹曰く，アメリカに住むカンボジア人女性の多くが，白人男性など他人種，他民族の男性との結婚を望むため，アメリカに住むカンボジア人男性にとってアメリカ国内でのカンボジア人女性の花嫁探しは難しく，母国に帰り，伝統的なカンボジアの理想の女性像にあるような夫に従順でよく働く若い女性の結婚相手を探すようになるのだという。ただし，アメリカでのカンボジア系男性の社会経済的な地位の差異による，結婚の方法の相違については，検討の余地がある。

7）共著者である Dr. Susan Needham（カリフォルニア州立大学 Duminguez Hills 校准教授）は，カンボジア・タウン社の役員（計10名）の1人。Dr. Karen Quintiliani（カリフォルニア州立大学ロングビーチ校教授）は，同社の諮問委員会メンバー（計15名）の1人（カンボジア・タウン社公式ウェブサイトより）。

8）Yamada（2006: 225）によれば，ロングビーチのカンボジア系住民の8割強が，非識字の稲作農民階級出身であるという。しかし実際には，稲作農民の中にも男性を中心に若干の識字者はいると思われる。

9）CAA は，1958年，カンボジア人留学生により，“Cambodian Students Association of America”として設立された団体を母体とする。難民への支援を契機に，1975年12月 NPO となる。近年では，200万ドル近くの予算があり，40人のスタッフを雇用し，カンボジア系を中心とする約3,000人のロングビーチの東南アジア系住民に様々なサービスを提供している（CAA 公式ホームページ；www.cambodian.com/CAA/about.htm）。

10）UCC は CAA から政治的な差異によって分離した組織であるが，現在では，共同プロジェクトの実施などを通して政治的対立は緩和されつつある（Yamada 2006: 221）。

11）しかし一方で，ロングビーチのコミュニティは，全米の他の地域に比較して人口も多く，（カンボジア語の通じない）市当局や警察などと度々コンフリクトを起こしていたり，有力な MAAs の2団体が拮抗していたが故に，全米各地にあるカンボジア系コミュニティの中でもコミュニティ内部の政治的対立による緊張感の最も高い地域であったとの指摘もある（Yamada 2006: 223）。

12）ロングビーチ市公式ホームページより。

13）カリフォルニア州立大学ロングビーチ校は，ロサンゼルス＝オレンジ郡立大学として，1949年9月に設立された。ロサンゼルス市およびロングビーチ市周辺で，カンボジア系アメリカ人学生が在籍している主な大学として他に，カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA），ロングビーチ市立コミュニティカレッジ（短期大学）（LCC）などがある。ロングビーチ市立コミュニティカレッジの学生団体について大学事務に問い合わせたところ，カンボジア系学生のアソシエーションは以前は存在していたが，8年前から大学への登録はされておらず現在は，公式には存在しないとのことであった。

14）よく知られたギャング集団の名前として，Exotic Foreign Creation Coterie, Tiny Rascals, Asian Boyz といったグループがあった（Needham and Quintiliani 2007: 45）。

15）「キリング・フィールド」とは，ポル・ポト時代国内各地に設けられた処刑場の別称で，

1984 年には，同政権の恐怖政治の中で，虐殺された人々が野ざらしにされた荒野を描いた「キリング・フィールド」というタイトルのアメリカ映画が公開された。

16）アメリカの国勢調査における人種，エスニック・グループは，自己申告制である（明石・飯野 2004: 7–8）。「アジア系」の定義とは，まず全国民を 6 つの主な人種グループ；「白人」,「黒人もしくはアフリカ系アメリカ人」,「アジア系」,「アメリカン・インディアンかアラスカ・ネイティヴ」,「ハワイおよび太平洋諸島のネイティヴ」,「その他の人種」――に分け，さらに各人種内部の細目を設けている。アジア系の場合は，少なくとも同系人口の中で 1% 以上を占めるグループ；日系，中国系，フィリピン系，カンボジア系など，11 のグループを細目に挙げている。これらは，民族的分類であるモン族を除いて，全てナショナリティに基づく（United States Census Bureau 2004: 1–3）。

17）岡崎（2006b: 255）によれば，カリフォルニア州にある 5,000 軒のドーナツ・ショップの 9 割が，カンボジア系の経営であるという。管見では，カンボジア・タウン内には，2007 年 10 月時点で 2 軒のドーナツ・ショップがあった。そのいずれも，1 つ 1 ドル以下で販売しており，他のファースト・フード店に比べてもかなり安価である。ロングビーチのカンボジア系コミュニティ誌の 1 つ *CAM-NEWS*（隔週刊）396 号（2007 年 10 月 6 日–19 日，A3，全 56 頁）には，ドーナツ・ショップの求人広告や店舗の売り渡し，賃貸（2,000〜3,000 ドル／月）などの広告が 11 件見られる。

18）カリフォルニア州には，宝飾に関する技術・知識の向上やカンボジア系のビジネスを相互扶助する目的で，NPO として活動している Cambodia Jewelry Association of CA, U.S.A. がある。同協会が，2002 年に第 2 版を発行した“Jewelry skills and techniques”（主にカンボジア語で記述）内の店舗リストよれば，全米におけるカンボジア系宝飾店は，当時 77 軒を数え，うちカリフォルニア州に 58 軒，マサチューセッツ州に 11 軒となっている。

19）ロングビーチ市内で「文化的／歴史的区域」（Cultural/Historical district）として指定されているのは，カンボジア・タウンおよびイースト・ヴィレッジ・アート地区の 2 箇所である。

20）ロングビーチの海岸沿いに形成されている。Bank of America など金融機関の大きなビルや，巨大なコンベンション・センター，高層コンドミニアムなどがあり，アナハイム通りに比べると歩行者には白人の割合が比較的高い。

21）Golden Coast Bank。預貯金およびカンボジアやメキシコなどへの送金業務を行う。

22）アメリカ到着時の年齢により，カンボジア語の言語能力は異なる。現在，アメリカで生まれた 2 世，3 世，中でも高等教育へと進学する人々は英語を優先しており，カンボジア語は片言程度の人が多い。結婚や，家族呼び寄せ制度などにより，現在のところカンボジア生まれのカンボジア語のネイティヴは，常に補強されており，アナハイム通りの店舗では高齢者や 1990 年代後半や，2000 年代に来たニューカマーを中心にカンボジア語でのやりとりが飛び交っている。

23）管見では，もう 1 軒の教会が見られた。

24）アメリカのカンボジア系仏教協会（http://www.cambodianbuddhist.org）によれば，同協会が把握している全米各地のカンボジア系仏教寺院として，84 の寺院のリストがある。そのうち，住所で見る限りロングビーチ市内に所在するのは, 7 つの寺院である。もっともアナハイム・ストリート周辺には，タイ系住民などもおり，他のエスニック・グループと共有の仏教寺院もさらにあることは考えられる。

25）たとえば，カンボジア・タウン（アナハイム・ストリート）の大半は，ロングビーチ市の都市計画のゾーンニングの区分では,「CCP（Community Commercial Pedestrian-oriented）」とされている。またその周辺の住宅街は,「R-2-N（Two Family Residential, standard lot）」に指定さ

れている（ロングビーチ市ウェブサイトより）。

26）ロングビーチ市の地元紙である *Press Telegram*（2007 年 12 月 8 日）によれば，ロングビーチ市の住宅価格は，レイクウッド，サウスベイといった近隣地域に比べて長い間低く抑えられてきた。しかし，市当局はこうした事態を打開するため，校区の整備や，レストランやバー，商店の増設など社会的状況を向上させ，魅力ある地域であることを，アピールしようと努めてきた。また住宅ブームの波に乗り，近年住宅価格は上昇しつつある。その事例として，カンボジア・タウンを含む郵便番号 90804 の地区では，昨年中に平均住宅価格が，50％程度跳ね上がったと見られることを挙げている。

27）シェムリアップ・レストラン，ラ・リュヌなど，舞台や円卓などの設備を備えた結婚式場を兼ねているレストランが見られる。

28）ロサンゼルスのメトロ・レールは，表示および構内・車内アナウンス等，英語とスペイン語の 2 ヶ国語が使用されている（2007 年 10 月調査時点）。

29）カンボジアにおいて，マジョリティのクメール人の正月であるクメール正月（チョール・チュナム・クマエ）は，10 月にある盂蘭盆会と並び，1 年で最も大きな年中行事である。毎年 4 月 13 日～15 日もしくは 14 日～16 日の 3 日間が祝日となり，新年には天から新しい神が降り，その年の守護神となることを祝う。カンボジアでは 1 週間程度休日になり，帰郷者で道がごった返す。しかし，ロングビーチ市では，カンボジア正月は公休日にはならず，人々は，13 日から 15 日に最も近い週末をクメール正月として祝う（Phim 2007: 115–117）。たとえば，約 2,200 人強のカンボジア系住民が暮らすと言われる日本においても，毎年 4 月中旬の日曜日に，かつてインドシナ難民を受け入れた大和定住促進センター近くの神奈川県の大和市や相模原市で在日カンボジア人の人々によるクメール正月の祭りが，市民体育館や，市の会館などで催されており，2 世，3 世も含めた老若男女多くのカンボジア系住民の参加者と少数の日本人の参加者で盛り上がる。参加費は，会場受付の場で任意の額を支払う。始めに日本国外から招いたカンボジア人僧侶がお経を唱え，続いて僧侶への寄進が行われる。その後，若い女性達によるアプサラダンス，大使や開催関係者の挨拶などがあり，合間でカンボジア料理が振舞われる。最後に，参加者全員で輪になっての踊り（ロアム・ヴォン）がある。

30）Navy Phim は，1975 年 4 月 9 日，カンボジア北西部のバット・ドンボーン州で農民の両親のもとに生まれた。その後，タイのカンボジア難民キャンプで育ち，フィリピンを経由して，1984 年 9 歳でアメリカに渡った。カリフォルニア大学バークレー校で英語学と人類学の学位を取得した後，カリフォルニア州立大学ロングビーチ校でカウンセリングの修士号を取得した女性である。Phim 自身にとって，正直に言えば，1975 年 4 月 17 日は特別な日ではなかった。当時彼女は生まれてまだ 8 日目であったし，しかも彼女の出身地がクメール・ルージュの手に落ちたのは，4 月 17 日より以前であった。

31）「サロン」はマレー語であるが，カンボジアでも腰巻のことを，サロンと呼ぶ。カンボジアでは，居宅時などの日常用として主に使用される。現在では，女性は，インドネシアやタイから輸入した工場製のバティック柄プリント布地を着るが，男性は，主に綿や絹でつくられたカンボジア製の格子柄の布を身につける。

32）町村（1999: 155–156）は，多民族都市ロサンゼルスでは，ひとつの場所に異なる歴史的背景を持つ人々の記憶が交差して累積しているが，同時に人々は，同じ空間をみずからの「場所」としてともに切り取って生きている，と言う。

33）たとえば，5.2. に記したように，カンボジア・タウン社の副会長が，ロングビーチ市におけるカンボジア・タウン設立後，カンボジア，シェムリアップ市でのジャパン・タウン設立に関心を示していることなどから伺える。

34）注 4 を参照。

文　献

明石紀雄・飯野正子

2004 『エスニック・アメリカ――多民族国家における統合の現実［新版］』東京：有斐閣。

アパデュライ，A.

2004 『さまよえる近代――グローバル化の文化研究』門田健一訳，東京：平凡社。

Coleman, C. M.

1987 Cambodians in the United States. In D. A. Ablin and M. Hood (eds.) *The Cambodian Agony*, pp. 354–374. Armonk, N.Y: M.E. Sharpe.

デルヴェール，J.

1996 『カンボジア』石澤良昭・中島節子共訳，東京：白水社。

2002 『カンボジアの農民――自然・社会・文化』石澤良明監修・及川浩吉訳，東京：風響社。

藤田真理子

1998 「グローバリゼーションとエスニシティ研究――多民族社会ロサンゼルスの挑戦」江渕一公編『トランスカルチュラリズムの研究』pp. 81–99，東京：明石書店。

原尻英樹

2000 『コリアンタウンの民族誌――ハワイ・LA・生野』東京：ちくま新書。

Hillburg, B.

2000 *Long Beach: the city and its people*. California: Carlsband.

Hing, B. O.

2002 *Reframing the immigration debate executive summary*. The State of Asian Pacific America a Public Report. LEAP Asian Pacific American Public Policy Institute and UCLA Asian American Studies Center.

町村敬志

1999 『越境者たちのロサンジェルス』東京：平凡社。

前川啓治

2004 「多文化主義と移民――オーストラリアにおけるベトナム系移民の民族誌」『グローカリゼーションの人類学――国際文化・開発・移民』pp. 161–190，東京：新曜社。

Molyvann, V.

2003 *Modern Khmer Cities*. Phnom Penh: Reyum.

Mortland, C. A.

2002 Legacies of Genocide for Cambodians in the United States. In J. Ledgerwood (ed.) *Cambodia Emerges from the Past: Eight Essays*, pp. 151–175. Illinois: Southeast Asia Publications Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University.

本山謙二

2004 「人種・エスニシティ」吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』pp. 123–145，東京：講談社。

Needham, S. and K. Quintiliani

2007 Cambodians in Long Beach, California: the making of a community. *Journal of immigrant and refugee studies* 5 (1): 29–53.

岡田知子

2006 「平和の島，東洋のパリ」上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための60章』pp. 178–182，東京：明石書店。

岡崎淑子
2006a「アイデンティティーの模索——海外で暮らすカンボジア人達」上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための 60 章』pp. 250–254，東京：明石書店。
2006b「アメリカ最大のカンボジア系コミュニティ」上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための 60 章』pp. 255–256，東京：明石書店。
Phim, N.
2007 *Reflections of a Khmer Soul*. Arizona: Wheatmark.
関根康正
2004「都市のヘテロトポジー——南インド・チェンナイ（マドラス）市の歩道寺院から」関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在——文化人類学的考察』pp. 472–512，東京：東京大学出版会。
Yamada, T. S.
2006 The Spirit Cult of *Khleang Moeung* in Long Beach, California. In J. Marston and E. Guthrie (eds.) *History, Buddhism and New Religious Movements in Cambodia*, pp. 213–225. Chiang Mai: Silkworm Books.
山口　覚
2006「ひとつの場所／いくつかのシーサー——宝塚市における沖縄出身者と『沖縄』」三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィ——社会を書く／差別を解く』pp. 238–273，京都：世界思想社。

統計資料
National Institute of Statistics(NIS), Ministry of Planning, Cambodia
2006 *Kingdom of Cambodia Statistical Year Book 2006*.
United States Bureau of the Census, Department of Commerce, Economics and Statistics Administration
1993 *We the Americans: Asians*.
2004 *We the people: Asians in the United States* (2000 Census Special Reports).

ウェブサイト
ロングビーチ市公式ホームページ
http://www.ci.long-beach.ca.us/ecd/attraction/smart_location/fast_facts/default.asp（最終アクセス日　2008 年 3 月 10 日）。
カンボジア・タウン社公式ホームページ
http://www.cambodiatown.org/（最終アクセス日　2008 年 3 月 10 日）。

新聞記事
「深まる独中交流　初のチャイナタウン構想」『産経新聞』2007 年 10 月 23 日。

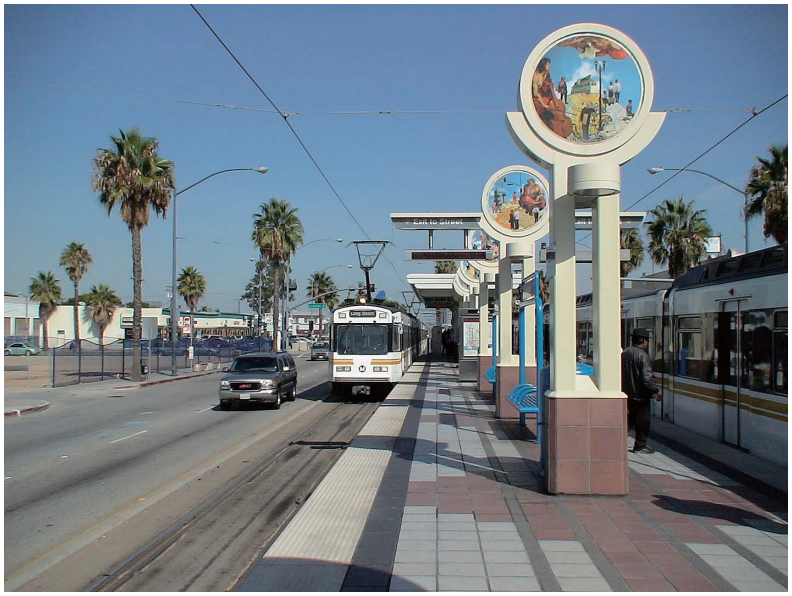


写真１　アナハイム駅（メトロ・ブルーライン）

写真２　アナハイム・ストリート

写真３　アン・ドゥオン・マーケット

写真４　スーパーマーケット入り口の掲示板，歌謡コンサート，家屋の賃貸，仏教行事などの掲示が多い

写真５「クメール・スター・ギフト・ショップ」２号店，衣服やカンボジア語のカラオケ CD，DVD などを販売する

写真６　復活した UCC（United Cambodian Community）などが入ったビル，カンボジアの現与党である人民党のマークが玄関を飾る

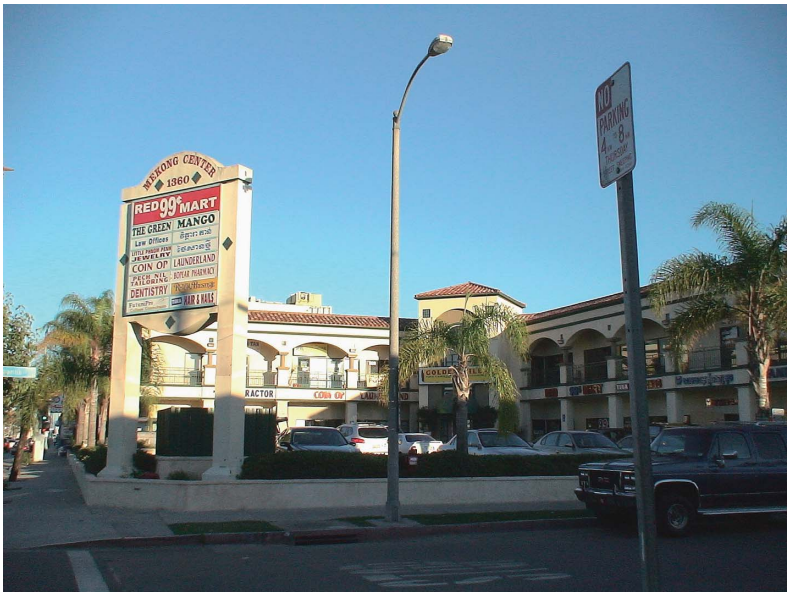


写真７　メコン・センター（複合型ショッピングセンター）

写真８　周辺の民家の形状と変わらぬ上座部仏教寺院，仏教旗とアメリカ合衆国国旗が掲揚されている

写真 9　カンボジア・タウン北方の丘（シグナル・ヒル）に見える住宅街

写真 10　スペイン語はなします（左），カンボジア語はなします（右）と書かれた医院の看板

写真 11　英語，スペイン語，カンボジア語の 3 ヶ国語表記の薬局

写真 12　仕立て屋（ノーブル・ファッション）の外観

写真 13　仕立て屋（マチャー・ブティック＆ファッション）の店内，プノンペンから仕入れた衣服と，ロングビーチの同店内で作られたカンボジア式パーティー用衣装が並ぶ

写真 14　カンボジア文化村エントランス

写真 15　中国人の村

写真 16　クメール人の村

写真 17　在外（アメリカ）カンボジア人の村

写真 18　「在外カンボジア人」の家屋

写真 19 「幸せな家庭」（博物館展示）